

KATE 国際学会報告

- ・ 派遣者： 樋口 晶彦
- ・ 所属： 鹿児島大学
- ・ 派遣先学会： KATE 2004 International Conference
- ・ 学会テーマ： “English Education from Socio-Cultural Perspectives”
- ・ 派遣先： Seoul National University, Republic of Korea
- ・ 期日： June 24th – 26th (Associate Day, 24th, Conference, 25th- 26th), 2004

1. 学会（発表、講演内容）に関するコメント

2004 年度 KATE(The Korea Association of Teachers of English)国際学会は、6 月 24 日夜のソウル大学ゲストハウスにおける歓迎晚餐会を皮切りに、6 月 25 - 26 日の両日、同大学において開催された。今年度の発表件数は 114 件（ポスターセッション、ワークショップを含む）で、その内、世界 13 国より 55 名の研究発表も含まれていた。学会全体への参加者数は、26 日の場内アナウンスでは約 450 名という報告だった。盛会であったと同時に、研究発表の内容、器材、設備等、様々な面においてレベルの高さを痛感した学会でもあった。以下に概要を報告する。

今年度の学会のテーマは、“English Education from Socio-Cultural Perspectives”であり、近年高まってきた外国語学習における「社会文化的側面」を考えさせる良い機会を提供してくれたものであった。従来、外国語学習の支配的な考え方は、言語習得の生得的な面とか、機能的面等に主眼が置かれてきたように思うが、Vygotsky の心的交流を通じた学習というものの解釈が、外国語学習の多面性の理解を深め、さらに、従来の外国語学習の概念を大きく変えてきている印象を強く持った。

初めて Vygotsky の名前を耳にしたのは、まだ今から 10 年も経たない JACET の春季講習会（東京）のことであり、当時から Vygotsky は非常に哲学的で小生には難解なものだった。しかし、今回の基調講演で“internalization”という概念、その定義には以前よりは前進できたように思う。やはり、この基調講演が James Lantolf 教授(Penn State Univ. アメリカ応用言語学会(AAAL: The American Association for Applied Linguistics)会長によるものだったことが、小生の理解を助けてくれたものだったと思う。Lantolf 教授の演題は、“Internalization and L2 Learning”で、その中で Communicative competence and Intercultural competence の部分が、小生には特に興味ある内容だった。Communicative competence というと、すぐに文法能力、社会言語学的能力、談話能力、方略的能力と考えがちであるが、決してこの四能力に限定されるものではないと思う。これを提言された Swain 教授御自身もこの枠組みを以前、修正されたと思う。（尚、Merrill Swain 教授は、今回都合により学会は欠席になった模様）何がコミュニケーション能力なのか、確固たる明確な定義がないのが現状ではなかろうか。そういう中で、Lantolf 教授の Intercultural competence の内容は説得力があり、示唆に富むものだった。

今回の Keynote speech とは別に Plenary speech として、Richard Donato(Univ. of Pittsburgh)、Michael Byram(Univ. of Durham)、さらに前述の Lantolf 教授の先生方が御担当された。Workshop では、Thomas Scovel 教授(San Francisco State Univ.)の元気な御姿が懐かしかった。まだ早朝のランニングは続けておられるらしい。それぞれの先生方の御発表は、本学会のテーマに即した Scio-cultural (Socio-political) perspectives の視点を含んだものだった。詳細は、Proceedings を御覧頂きたい。

前述した言語学習の「社会文化的側面」と同様に本学会で特に印象的に感じたことは、(これは後述する拙論の発表とも関連することであるが)北米の大学、例えば、Univ. of Pittsburgh, Univ. of Pennsylvania などの研究者達が東アジアの外国語教育、及び外国語教育政策に強い関心を抱き、既に研究に着手されていることだった。そして、それらが韓国、日本の早期英語教育が既に直面している、或いは近い将来直面するであろう諸問題の研究であるところに実は驚いたことだった。例えば、Donato 教授(Univ of Pittsuburgh)、Goto Butler 助教授(Univ of Pennsylvania)等の先生方は、日本、韓国の早期英語教育においてかなり精力的な研究、調査を実施されており、先生方との意見交換は有意義であり、今後、様々な面で示唆を与えてくれそうなものと感じた。

さらに、本学会で嬉しかった事は、KATE 現会長の Oryang Kwong 教授(Seoul National Univ)、さらに Park Mae-ran 教授(Pukyong National Univ)の先生方と久しぶりに旧交を暖めたことだった。特に Park 先生からは、韓国の小学校英語教育の現状をかなり積極的に御話し頂き、とても良かった。御二方とも相変わらず御多忙を極めておられる御様子だった。そして、何よりも彼らの卓越した英語力には脱帽することだった。韓国の大学の先生方の英語力、特に「話す力」は相当高いと感じている。

2. 派遣者の発表に関して

小生の発表のタイトルは、Aims of the “Action Plan in Japanese English Education:” The Case of Super English Language High Schools (SELHi)とした。このテーマ設定の理由は、韓国の研究者に対して日本の英語教育で今何が起きているのかを伝える必要を感じたことと、文科省の SELHi の企画評価委員会に現在関わっていること、さらに、韓国の修学能力検定試験(CSAT)の分析に関わってきたこと等があった。特に、最近収集したデータから TOEIC と CSAT との強い相関のことも伝えたかったし、我国のセンター入試の改善すべき点、CSAT の読解問題の評価(過大評価の部分も含めて)我国の英語教育が目指している部分、改善すべき点などを韓国の研究者に伝えたかった。

周知のように、1994 年度からの CSAT の導入は、当時の韓国教育部の第 6 次教育改革によるものだった。現在は、第 7 次教育改革が進行中で、その英語教育の特徴は実践的で実用的な色彩が極めて濃厚なものである。韓国は、「日本を追い越せ」、「日本の轍を踏むな」ということで、1997 年導入の早期英語教育においても、導入前に 15 年間も議論を重ねて

きた経緯がある。さらに、CSAT 導入以降、TOEFL の日本との国際比較を見ても、大きく水を開けられているのが現状であろう。こうした現状を鑑みると、韓国の外国語教育政の優れた点は何か、我国が改善すべき点は何かを考えざるをえなくなる。我国の多くの研究者が韓国の外国語教育、政策に強い関心を抱き始めたのは、こうした理由によるものが大きかったのではなかろうか。

しかし、このように我国の多くの研究者が韓国の外国語教育政策や CSAT に強い関心を抱いてきた一方で、「韓国の研究者の多くは、我国の英語教育の現状をあまり理解していないようである」との指摘が昨年、韓国応用言語学会(ALAK)へ派遣された Robert Fouser 京都大学助教授から受けていた。従って、今回の KATE においては、Action Plan, SELHi など、今日の英語教育における我国の大きな変革はどうしても伝えておきたいことだった。

発表者の反省としては、CSAT と Action Plan, SEHi を一まとめにして発表したことがまず挙げられる。もう少し内容をピンポイントすべきだった。緊張の挙句、Power Point の操作でもボタンを押し間違えてしまった。そのせいで天井からスクリーンを映し出していたカメラが突然、天井裏に引っ込んでしまったりして大いに狼狽した（小生には決して珍しくはないのだが、学会派遣としては赤面の至りである。）以上、猛省すべき点だった。

3 . JACET と KATE との関係に関するコメント

特筆すべき諸点は、以下のように要約される。

- ・ 新しい KATE の会長は、Dr. Jeon Byungman (Chonbuk National University)が総会において選出されたこと。(E-mail: bmjeon@moak.chonbuk.ac.kr.)さらに副会長として四名が選出された。
- ・ 次回の KATE International Conference の詳細は現段階では未定。しかし、例年同学会は 6 月下旬に開催されるので、おそらく来年もその方向になりそうであること。詳細な最新の情報は、www.kate.or.kr で御覧頂きたい。
- ・ JACET からの派遣を来年度も期待しているし、KATE としても喜んで受け入れる準備があること。KATE が JACET からの派遣者に対して行っているような待遇を JACET にも同様に御願いたい。(例えば、滞在に関する諸費用、食事、交通、宿泊費などのホスト学会の負担)
- ・ KATE からの JACET への派遣も積極的に受け入れて頂きたいこと。双方の積極的で友好的な関係を今後も強く維持していきたいこと。

最後に、このような機会を提供して頂いた JACET、事務局、関係各位に対して心より御礼申し上げます。そしてソウル大学大学院生の Shin, Yunnah さん、Jeon さんの御二人にも感謝する次第です。有難うございました。御世話になりました。

(報告者： 樋口 晶彦 鹿児島大学)